卒業後3年を経過した本学卒業生へのフォローアップ・アンケート調査について (令和4～6年度のまとめ)

京都教育大学では、第4期中期目標・中期計画期間の計画(10)-2において、学生・卒業生や社会・教育現場を対象に、本学の教育活動に関する定性的指標を毎年度把握・点検することとしている。その一環として、I R 専門委員会では本学の教育研究の質保証および今後の施策の参考とするため、卒業後3年を経過した学部卒業生を対象にフォローアップ・アンケート調査を実施した。

調査の概要

対象者は、令和4～6年度に卒業後3年を経過し、卒業時に教職（保育所・認定こども園を含む）に就いた学部卒業生（主に平成27～平成29年4月入学、平成31年3月～令和3年3月卒業）。各学科を通じてWeb（Google Forms）によるアンケート調査を実施した。

調査時期は、各年度とも9月～11月であった。

有効回答数は、令和4年度52名（教職に就いた者の30.8%）、令和5年度49名（同31.8%）、令和6年度68名（同39.3%）であった。いずれの年度においても全ての専攻の卒業生から回答を得ている。

質問項目は以下の通り。質問1～5は自由記述形式で回答を求めた。

基本情報：勤務地、学校種、採用形態、1～3年目に担当した学年、担任経験の有無、校務分掌、等

質問1：日々の勤務の中で、大学での学びが活かされていると感じること

質問2：在学中にもっと身につけておいた方がよかったこと

質問3：日々の勤務の中で、とくに苦勞していること

質問4：スキルアップのために、学んでみたいあるいは興味のあるテーマ

質問5：卒業生の立場から見た京都教育大学の「強み」と「弱み（課題）」

令和4～6年度の調査結果の概要

令和4～6年度の3年間全体をまとめると、以下のような傾向が窺われた。

- ・ 担当学年は、小・中学校では初任時に低学年が多く、勤務年数とともに学年が上がる傾向がみられる。高校では複数学年の担当が多い。校務分掌については教科の他、ICTや生徒会・児童会、生徒指導等をはじめとして多岐にわたっている。
- ・ 勤務の中で大学での学びが活かされていると感じること（質問1）について、講義や実地教育が多く挙げられ、特に専門知識と授業法（指導法）が授業に活かされているとの回答が多い。
- ・ 在学中にもっと身につけておいた方がよかったこと（質問2）として、授業力や教科の

専門性が多く挙げられている。生徒指導や特別支援教育、保護者対応も挙げられている。

- ・ 日々の勤務の中でとくに苦勞していること（質問3）としては、学校園種により様々であるが、特別支援を含めた児童生徒への対応や保護者対応が挙げられている。また、業務量の多さや長時間労働についても挙げられている。
- ・ スキルアップのために学んでみたい、興味のあるテーマ（質問4）については、授業づくりや授業力の向上、児童生徒への指導力、特別支援教育や心理学、カウンセリングなど個に応じた支援に関する事柄、ICT教育やPCのスキルに関する内容が挙げられている。
- ・ 卒業生の立場から見た京都教育大学の「強み」と「弱み（課題）」（質問5）について、強みとしては教育に関する幅広い知識の習得や実践的な学び、実地教育の充実複数免許の取得しやすさ、少人数制による手厚い指導、さらには在学中及び教職就職後における人のつながりが挙げられている。
- ・ 一方で課題としては、保護者対応やテスト作成などの実践的な学びの機会の充実、附属校での教育実習と他の教育現場との間に感じる違いへの対応、教職以外の進路に対する支援の強化などが挙げられている。

また、3年間の調査の調査を通して、令和6年度において過年度と異なる点の一つとしてICT教育に関する回答の変化が挙げられる。すなわち、質問1（大学での学びが活かされていると感じること）や質問2（在学中に身につけておいた方がよかったこと）におけるICT教育に関する回答が減少している。その一方で、質問4（スキルアップのために学びたいテーマ）では、ICT教育に関する回答が一定数見られた。この変化の要因として、学校現場における新型コロナウイルス感染症の影響によりICT活用が普及し、またGIGAスクール構想が推進されていた令和4、5年度を経て、令和6年度にはそれらがある程度浸透したことが考えられる。また、ICT関連の情報は常にアップデートされるため、在学中よりも現職に就いてから学ぶべき課題として認識される傾向にあると推察される。

以上